2019年度　標準学力調査　指導改善リーフレット　国語

● 対　象 ：市内の公立小学校4年生、中学校１、２年生　　●実施期間：平成31年5月20日(月)～5月24日(金)

全体的な傾向（【標準学力調査+】分析用参考資料より:課題改善研修会（９月）配布）

成果
- 【伝国】における、主語・述語（小４3(1)）や漢字を読む（小４2(1)②③）はよく身についている。
- 【話すこと・聞くこと】における、話の内容を聞き取る（中１1(2)）はよく身についている。
- 【伝国】における、漢字を読む（中２2(1)②③）はよく身についている。

課題
- 【伝国】における、漢字を書く（小４2(2)①②）は全国的な傾向より下回り、平均正答率も①50.9%、②41.8%と課題がある。
- 【書くこと】における、作文（小４7）は全国的な傾向より下回り、平均正答率も低く課題がある。
- 【伝国】における、漢字を書く（中１2(2)①②）は全国的な傾向より下回り、平均正答率も①20.9%、②44.8%と課題がある。
- 【伝国】における、漢字を書く（中２2(2)②③）は全国的な傾向より下回り、平均正答率も②41.7%、③33.2%と課題がある。
- 【書くこと】における、作文（中１7）（中２7）は全国的な傾向より下回り、平均正答率も低く課題がある。

①課題となる問題【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項】漢字を書く

分析

学年配当漢字を書くことの定着が不十分である。

指導にあたって

漢字の学習で大切なことは、その意味や使い方である。よく使われる例文も一緒に学習する習慣を身に付けさせることが大切である。また、学校生活において、自分の考えをまとめたり振り返りをしたりする際に、使わなければならない漢語をいくつか示すなど、学習した漢字を使う機会を意識的に設定していく必要がある。

指導例

日頃　書き慣れている漢字は書ける

ポイントは、習った漢字は「使う」ことで身につくということ。

漢字の習得方法の例

児童生徒に漢字の習得方法を教える

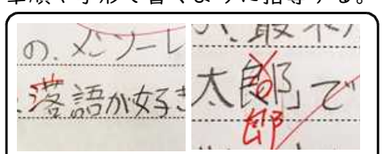
新出漢字　新しい漢字との出合い
- ①文脈の中で意味と使い方を知る。(国語辞典・漢和辞典を活用する)
- ②字形と筆順に気を付けて正しく写す。
- ③熟語で、または送り仮名と共に繰り返し練習する。(回数は何回でもよい。多ければいいということではない)
- ④覚えたかどうかを自分で確かめる。
- ⑤覚えていない場合は③に戻り、正しく書けない場合は②に戻る。

その後の漢字とのつきあい方
- ①国語の授業以外においても文章を書く際には、既習の漢字を使う。
  →ひらがなで書いている場合には、漢字で書くように促す。
- ②同音異義語や同訓異字等にまで学びを広げる。
  →漢字や部首の意味を理解していないと違いを理解できないことに気付かせる。

指導上の留意点

授業では…
- ①漢字や部首の意味、文脈における語句の意味等、意味をしっかり押さえさせる。
- ②間違えて覚えた筆順や字形はなかなか直せないので、覚え初めに正しい筆順や字形で書くように指導する。
- ③文章を書く際に習った漢字を使って書くよう指導する。
- ④辞典を活用する習慣をつける。

他教科や授業以外の場面において…
- ①国語以外で書いた文章についても既習漢字を使うよう指導する。
- ②読書を推進することでさまざまな漢字や語句に触れる機会をもたせる。
  →読解力だけでなく、語彙が増える機会であることも意識させる。



このように、字形の間違いも丁寧に指導することが大切です。資料提供 識名小 本村良太教諭

②課題となる問題【書くこと】作文

分析

問題で示された条件に従って文章を書く力の定着が不十分である。

指導にあたって

日頃から、200字程度の長さで、自分の考えとその理由をまとめる活動を繰り返し行うことにより、中心を捉えた文章を書くことができるようになる。継続的に取り組んでも、児童にも教師にも負担のない分量であるので、学習の記録、読書感想文、日記など数多くの場面で書く経験を積ませることが大切である。

指導例

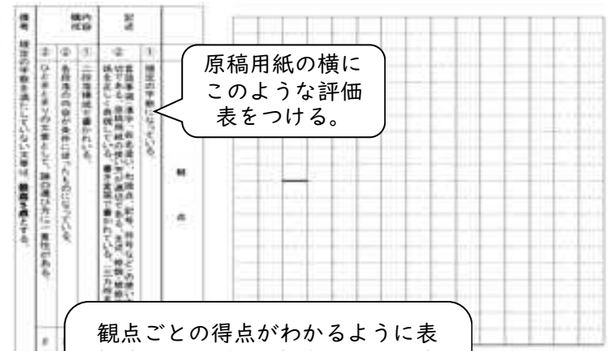
短い文章を書く機会をできるだけ多くつくる

ポイントは、児童生徒自身が文章を書く上での課題を知って、改善していこうとする態度を育てること。

指導上の留意点
- ①条件を設けた短作文を書かせる。
  →「三段構成」「第一段落には…」など、条件を設ける。条件の内容は「付けたい力」に合わせる。
- ②評価を短期間でフィードバックする。
  →長い期間を置いてフィードバックするよりも効果的なので、字数は100字から300字くらいで。
- ③評価規準を焦点化する。
  →一つの作文において、あれもこれも評価するのではなく、付けたい力に沿った観点を設定して評価する。
  例　根拠が適切であるか、考えと事実を書き分けているか、文体は統一されているか、文のねじれはないか等
- ④支援を要する児童生徒には、同じ課題を繰り返し出し、前回よりも良くなっている点について一緒に確認する等の取組も考えられる。

例

備考	構成・内容			記述		
規定の字数を満たしていない文章は、最高5点とする。	③	②	①	②	①	観点
	ひとまとまりの文章として、論の展開に一貫性がある。	各段落の内容が条件に従ったものになっている。	三段落構成で書かれている。	言語事項（漢字、仮名遣い、句読点、記号、符号など）の使い方が適切である。主述、修飾・被修飾の関係を正しく表現している。書き言葉で書かれている。	原稿用紙を正しく使っている。	
	2	2				8
	1	1	3	1	2	点
	0	0	0	0	0	



原稿用紙の横にこのような評価表をつける。

観点ごとの得点がわかるように表記すると、どこに課題があるかすぐ分かるので、フィードバックがしやすいという利点があります。

「書く」必然性をもたせた言語活動の設定

ポイントは、対象を捉え、「伝える」意識をもたせること。

※もちろん「言語活動」の評価は「書く」だけではありません。今回は「書く」に焦点を置いています。

〇例えば、『全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた授業アイディア例』を活用する。

https://www.nier.go.jp/jugyourei/h31/index.htm

例

平成30年度　全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた授業アイディア例　小学校より
- ・「マイベストメニューをおすすめする文章を書こう」
  ～目的や意図に応じ、文章全体の構成や表現を工夫して、推薦する文章を書く～

平成29年度　全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた授業アイディア例　中学校より
- ・「読んだ本の魅力を紹介する」～文章の表現の工夫について、自分の考えを分かりやすく伝える～
- ・「『〇〇中学校の生活』を紹介する資料を作ろう」～見通しをもって情報を収集する～

など…

2019年度　標準学力調査　指導改善リーフレット　算数・数学

● 対　象 ：市内の公立小学校４年生、中学校１、２年生　　●実施期間：平成31年５月20日(月)～５月24日(金)

全体的な傾向

（【標準学力調査+】分析用参考資料より：課題改善研修会（９月）配布）

成果
- 【領域Ａ：数と計算、数と式】における、わり算（小４[5](1)）や小数・分数の計算（中１[1](2)）、文字式（中２[1](6)、[4](2)）はよく身についている。
- 【領域Ｃ：図形】における、円と球・三角形（小４[12](2)）や平面図形（中１[10]）についての知識はよく身についている。

課題
- 【領域Ａ：数と計算】における、かけ算（小４[1](6)、[14]）は全国的な傾向より下回っている。
- 【領域Ｃ：変化と関係、関数】における、反比例の読み取り（中１[16](2)）や負の数まで拡張した比例・反比例の捉え（中２[9](2)(3)）についての知識の習得ができていない。また、比例することを基にした方法の説明は平均正答率9.8%と課題がある。
- 【領域Ｄ：データの活用】における、場合の数の求め方（小４[16](2)）や、理由を説明したり数学的に説明したりする問題（小４[16](2)、中１[20](3)、中２[17](3)）が、平均正答率約20%と課題が見られる。

① 課題となる問題【領域Ａ：数と計算】における、かけ算　小学校４年

分析

何十をかけたときの部分積をかく位置（位取り）に間違いがあるなど、計算の仕方の意味の定着が不十分である。

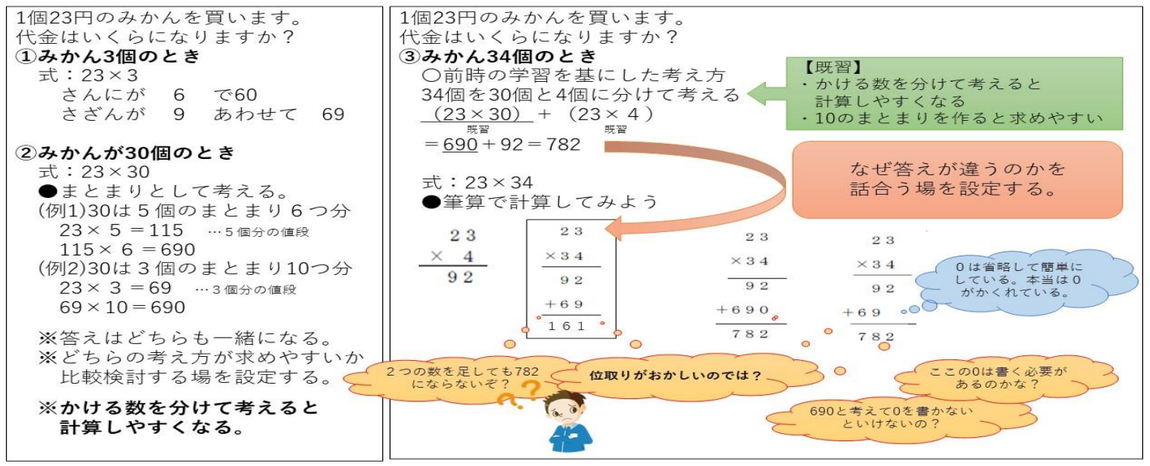
指導にあたって

知識・技能を習得する時間においては、単に計算方法のみを教えるのではなく、(2位数)×(1位数)の計算の学習を基にして、(2位数)×(2位数)の計算方法を考えさせるなど、計算の仕組みや間違い等について説明し合う場を設定する。また、授業と連動した宿題を与えて、継続的に反復学習に取り組ませることも必要です。

指導例

『１けたをかけるかけ算の筆算』において、（２，３位数）×（１位数）の計算の仕方を，１０や１００を単位として考えさせたり、数の仕組みや計算のきまりをもとに考えさせたりする。

それを基にして、『２けたをかけるかけ算の筆算』において、２位数をかける筆算の仕方を，既知の計算（１位数をかけるかけ算と何十をかけるかけ算）や分配法則によって考えさせる。



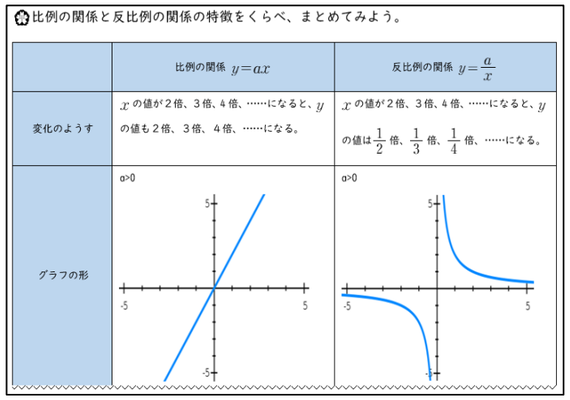
② 課題となる領域【領域Ｃ：変化と関係、関数】　中学校２年

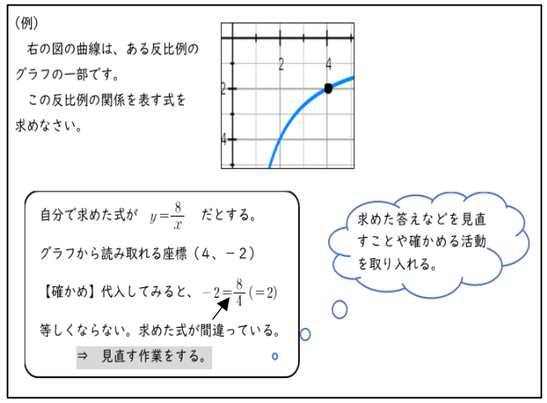
分析

比例や反比例について、比例定数によって表やグラフがどのように変化するのかを理解できていない。

指導にあたって・指導例

- 学習している内容の系統性を小学校段階から確認し、発達段階に応じた課題を与える。特に中学校では、変域を負の数まで広げた時に課題が見られるため、表・式・グラフを関連付ける活動を設定する。
- 課題学習や宿題として、表・式・グラフでそれぞれの特徴をまとめるような場を設定する。
- グラフや表と式を相互に関連付け、グラフが通る点の座標や表のｘ、ｙの値の組を、選択した式や求めた式に代入することで、本当に成り立つかどうかを確かめさせることも必要です。





③ 課題となる問題・領域【説明する問題・Ｄ：データの活用】

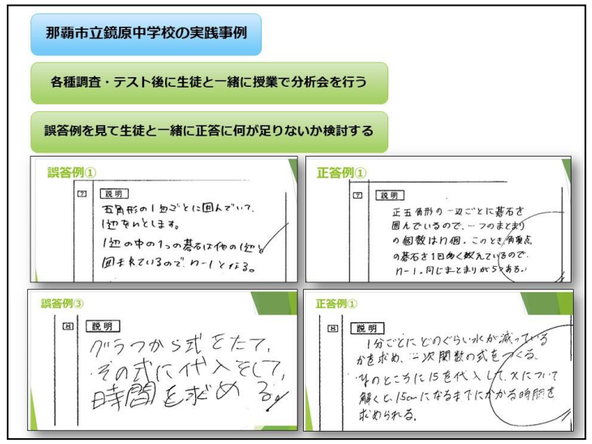
分析

- グラフなどのかき方が分からない。かいては見たものの、正しいかどうかの判断がつかない。
- 何について説明をすればよいのか、見通しをもって説明を構想することができていない。

指導にあたって・指導例

- 問題解決のために、何をどのように用いればよいか説明し合う場面を設定し、検討させる場を設定する。
- 収集したデータやそれを整理したグラフの形から分布の特徴などを数学的な表現を用いて説明する場を設定する。
- 小テストや単元テスト等に、記述式の問題を計画的・意図的に取り入れ、日頃からかく活動を行う。
- 以下に示す記述式の問題内容において、

「記述式」の記述内容を整理すると以下のようになる。
- 見いだした「**事実・事柄**」の説明
- 事柄を調べる「**方法や手順**」の説明
- 事柄が成り立つ「**理由**」の説明

※　全国学力・学習状況調査「解説資料」より　抜粋

説明するための型をある程度示すことで、それを基に児童生徒が自分なりに正しいかどうかの判断をしたり、児童生徒がお互いの説明を聞き合ったりする場を設定したりすることで、自分のかいた説明に不足している部分を見直したり、説明の構想を立てたりさせる。ある程度書けるようになったら、型から離れても書けるように指導する。